箕島球友会に地域の元気・奨励賞

野球以外も積極貢献

地元密着「謙虚さ忘れず」

都市対抗野球

今月15日に東京ドームで開幕する第87回都市対抗野球大会（毎日新聞社、日本野球連盟主催）を前に、和歌山箕島球友会（有田市宮崎町）が「地域の元気 総務大臣賞」奨励賞に選ばれた。野球を通じて地域に貢献し、全国のクラブチームのお手本になっていることが評価された。箕島球友会が取り組む野球教室や清掃活動などは地域で定着し、支援の輪が広がっている。受賞を機にチームは思いを新たにしていた。【高橋祐貴】

選手31人は「仕事も人一倍、野球も人一倍」の指導方針に基づき、野球と仕事を両立させている。大半の選手がスーパー「松源」に所属。一般社員と同様に仕事をこなし、練習が休みの日は、率先して仕事に取り組むなど、職場の人間関係にも気を配る。

箕島球友会の理事長を務める松源の桑原太郎専務は「高いモチベーションで仕事に取り組んだ結果、従業員の理解を得ることができ、サポート体制が自然と生まれている」と話す。

地域では、毎年11月に「親子でティーボール教室」を開き、今年で20年になる。約200人が参加し、子供のころに体験した人が親になって申し込むケースもあるという。

このほか、有田市と住民が取り組む「有田川クリーン作戦」に参加。市主催のマラソン大会では運営スタッフとしてテント準備、出場者の誘導、駐車場の管理などに当たる。原井和也ヘッドコーチ（48）は「真摯（しんし）に取り組む選手ほど、大会で好結果が出る。野球をやらせてもらっているんだなと感じる」と話す。

市は15年度から、ふるさと納税の寄付先を箕島球友会に指定できる制度を導入。これまでに全国から約1000万円の寄付が集まった。

昨年10月に出場した社会人野球日本選手権大会には、有田市の有志が応援団を結成し、約1500人が京セラドーム大阪（大阪市）のスタンドに駆けつけた。チームは1回戦でNTT東日本（東京都）に敗れたが、スタンドには大漁旗が掲げられ、盛り上がった。

西川忠宏監督は「野球だけやっていても強くはならない。謙虚な気持ちを忘れずに続けることで、応援の輪が広がっていくと思う」。林尚希主将（26）は「地域の方に『頑張ってきいや』と声をかけられることも多い。これから入団してくる選手にもしっかり伝えて、勝利につなげたい」と気を引き締めていた。

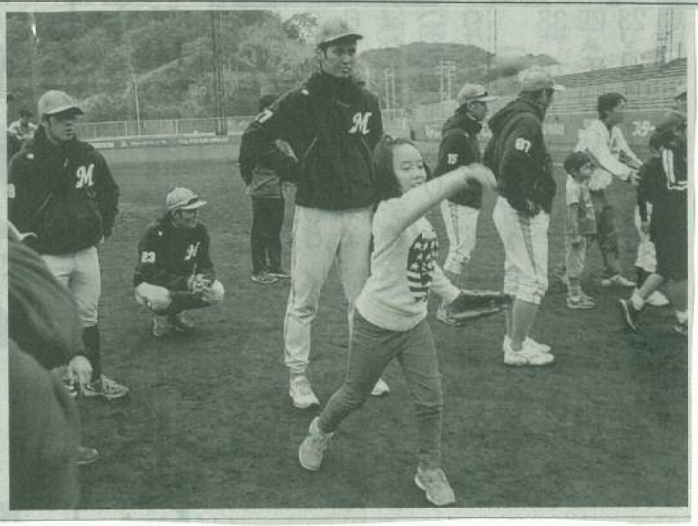
紙面編集 岡本 典子

和歌山箕島球友会

1996年、県立箕島高校（有田市）のOBが中心となって発足させた社会人野球のクラブチームで、今年20周年を迎えた。全日本クラブ野球選手権大会では2006年以来、3回優勝。社会人野球日本選手権大会にも4回出場した。

08年にNPO法人になり、11年から市の指定管理者として球場や体育館などの管理・運営に当たる。15年度には総合型地域スポーツクラブを立ち上げ、野球やグラウンドゴルフの教室を開く。

チームの運営は賛助会員の会費や寄付金などで支えられている。会員は団体が47社、個人が317人。毎年、全国から約10人の選手を採用しており、引退後も有田市に定住する選手が多いという。



野球教室で子供と交流する選手たち（和歌山箕島球友会提供）